

「温故知新」

読売新聞那覇支局長

星子育生

那覇空港から首里までを結ぶ沖縄都市モノレール。私にとって二度目の沖縄赴任となった一昨年九月には、建設中のコンクリートの橋脚だけが周りの風景からやけに浮き立って見



えたものだ。昨年末には試験運転も始まり、完成後の姿が何となくイメージ出来るようになった。今年五月十五日、本土復帰三十周年を迎える。来年末に開業するモノレールは、街の景観を大きく変え、沖縄の新時代のシンボルとなるだろう。

今年は沖縄の統一地方選の年でもある。今月告示の名護市長選に始まって多くの市町村で首長選や議員選が行われ、十一月には知事選も予定される。選挙で、今後の四年間の進路をどう方向付けるのか。沖縄政界で改革の重鎮だった元知事・西銘順治さんと、元那覇市長・瀬長亀次郎さんが昨年、相次いで亡くなったことも、一つの時代が終わりを告げたことを示している。

衆院議員だった瀬長さんを、最後の選挙となる一九八六年の衆参同日選挙前、県議会議場で取材したことがある。どんな会話を交わしたかは定かではないが、こんな場面を記憶している。

顔写真を撮らせてもらうため、カメラをのぞくと、意外に背が高く、フラインガーに収まりきれない。「瀬長さん、もうちょっと下の方に」こ

うですか」「もうちょっと……」「これくらいで……」。常に笑顔を絶やさず、気さくな物言ひ。まだ駆け出し記者だった私の要領を得ない撮影に、中腰の姿勢をさらに低くして答えてくれた。

集会でいつも会場の客席に座りきれないお年寄りたちが、「やまで敷いて瀬長さんの演説に耳を傾けていた。その人気の訳が分かったような気がした。

撮影当時の県議会議場は、隣の行政棟と共に琉球政府の歴史を刻む元立法院棟。古めかしくも、柱の一本や壁板一枚にさえ、先人たちの祖国復帰に対する熱い思いが刷り込まれているようだった。今では新庁舎に建て替わり、現地には記念碑だけが残る。今回赴任して気付いたことだが、ほかにも何と立派な施設が増えたことが

昔の情緒が伝わった糸満市の製糖工場跡が、華やかなショッピングモールに変わったのにも驚いたが、その代表格は県平和祈念資料館と思う。赤瓦の豪華な大規模施設は、本島北部のリゾートホテルと見間違っばかり。さて中身はどうだろう。

資料館のオープン直後、沖縄戦の全戦没者数を問い合わせたが、回答は要領を得なかった。資料館は博物館かと思っただけであくまでも、博物館類似施設。学芸員の資格を持つ職員はいない。「沖縄戦の資料館」という特殊事情から、日本史、西洋史の教師らをあてがっているというのが、

県側の言い分だ。が回答は余りにもお粗末ではなかったか。

戦没者数には国、県、米側の資料ではそれぞれ見解の違いがあり、戦争マリアナの被害者はこれこれで……といった説明が欲しかった。さらに言わせてもらえば、大きな負の遺産だけに、資料館には学芸員を置いて、県公文書館などの関係機関と連携しながら、年に一度ぐらいは沖縄戦を検証する研究論文を発表してもらいたい。

「古きをたずねて新しきを知る」。戦前、県民は貧困や差別にあえきながら、国宝級の遺産の多さは全国でも有数、という文化の豊かさを誇りにしていたという。戦争で県内の貴重な遺産の多くは消失。戦後、沖縄は米軍の圧政を経て、復帰後はひたすら本土並みを目指してきた。

そして新世紀「ユネスコの世界遺産に登録された、琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つ、首里城跡の城郭復元整備は今春完了。浦添市教委は浦添グスクの復元と公園整備……と、遺産の復元・保存・活用への取り組みはますます活発だ。一方で県立埋蔵文化財センターが一九九八年度から進める戦争遺跡調査のように、そろそろ「身近な遺産」にも目を配る時代にきているのではないだろうか。特に、復帰前の時代を刻む建物が次々と姿を消していく現状に、いささか不満を抱いている。